



女性会員の医師会活動への 参画を期待して

副会長 赤倉昌巳

1. はじめに

最近、政界、財界など各界での女性の進出は、目を見張るものがある。ところが、医師会活動における女性会員の活躍は、目覚ましいとは言い難い。その究明と今後の対策を兼ねて、去る9月8日、「今日の医療における女性医師の役割」のテーマのもとに日医女性会員フォーラムが開催された（道医報第983号掲載）。

筆者は、そのフォーラムに出席する機会があり、その中での討議を踏まえて、対策について考察したので報告する。

2. 女性医師の占める割合

最近、女性医師は著しく増加しており、医師国家試験の合格者における女性の占める割合は、すでに3割を超えている。ところが、日本医師会における女性医師の入会割合は、わずか約12%に過ぎない。

一方、北海道医師会の会員数における女性の加入割合は、約8.6%と、日医よりもさらに少ない状況にある。そして、女性会員の医師会活動への参画は非常に少なく、当会の執行部32名はもとより、代議員・予備代議員を合せて220名はすべて男性のみで、女性会員は皆無である。さらに拡大すると、道内48の郡市医師会・育機関医師会の役員を調べたところ、女性の役員は、わずか13名に過ぎない。このような背景を踏まえて、昨年、女性会員の医師会活動への参画を困難にしている要因を把握する目的で、北海道医師会医業経営・福利厚生部では、アンケート調査を行っている（道医報970号掲載）。

また、本年9月8日、日本医師会が開催した女

性会員フォーラムでは、「今日の医療における女性医師の役割」のテーマのもとにパネルディスカッションを行った。そこで、女性として勤務医や開業医の立場からの意見や地区医師会における女性医師の意見や活動状況についてパネラーやフロアからの発言があり、女性の医師会活動における阻害要因についても検討された。

女性会員の参加を促すための対策としては、まず、女性会員自身の意識改革であり、続いて、参加を容易にするための環境整備の必要性である。その具体策としては、女性部会を設置すること、女性会員を取り巻く諸問題の議論をすること、役員や委員会委員に一定の枠を設けること、各種会合や研修会開催の際の託児所を設けること、子育ての一環として医師会立の保育所を設置すること、などが提案された。

3. 活動への阻害要因

わが国には長い間続いた男尊女卑の歴史があり、それが戦後、突然、男女平等の権利が与えられたとしても、一挙に解決するとは考え難い。それが、女性の社会活動への参加を阻害する最も大きな要因であるといえよう。

北海道医師会をはじめ、いくつかの都県医師会が行ったアンケート調査の結果からは、夫や子供、さらには両親など家族の協力が得られ難いとの回答が多く見られた。このことは、男女共同参画社会実現のための法的措置は一応の決着を見たが、家庭はもとより、社会全般の因習や意識などの改革にはかなりの時間を要することを意味している。

当然のことではあるが、医師会という組織は会員自らが会費を拠出し、かつ運営しており、活動

にはボランティア的な要素が非常に強い。例えば会合は、どうしても診療時間外に行わなければならない。そのため、役員や委員会委員は、プライベートの時間を割かなくてはならないのが実情である。そこで、家庭を持っている女性会員の場合には、出産や育児はもとより、家事全般の仕事に時間を割かれるために、男性会員に比べて医師会活動への参画が非常に困難になる。そのためには、パートナーを始めとする家庭内でのコンセンサスを得ることが必要となるが、それが最大のハードルとなってしまう。医師会内部の環境整備は、その次の問題となるが、その件については前向きな検討が必要なことは、論を待たない。

4. おわりに

このたびの日医女性会員フォーラムでは、その具体策として女性部会や懇談会の設置、役員や委員会委員における女性会員の枠の設置、あるいは子育て支援対策としての託児所・保育所の設置な

どの意見も多く聞かれた。確かに、それらは重要な方策であり、十分意義のあることではあるが、それが女性会員の医師会活動に参画するための決定的な解決策になるかといえば、甚だ難しい問題でもある。

それには、女性会員が一人でも多く医師会活動に参画するための意欲を高めるための方策が必要になる。まず、できることから始めることが必要であり、一人でも多くの女性会員が特有のきめ細やかさを生かせるポストに就任し、活躍することこそが手本となり、全体の門戸を開くことにもなる。例えば、平成14年度の厚生労働省の苦しい予算の中で、「子育て支援対策」の関連予算が大きく伸びることが予測されている。学校保健関連などの支援対策は、女性医師が活躍できる場面の多いことが予想され、期待されるところでもある。

いま、女性会員は、女性としての特性を生かした医師会活動への参画が望まれるところである。